

日本中國學會報 第七十四集
二〇二二年十月八日 發行 拔刷

北京人文科學研究所における藏書形成と中國古典學

河野貴美子

北京人文科學研究所における藏書形成と中國古典學

河野貴美子

はじめに

小稿は、一九二七年に日本が北京に設置し、一九四五年まで蒐書、研究活動が行われた北京人文科學研究所^{〔1〕}における藏書形成の調査と觀察を通して、中國古典學研究のありかたを考察する。

筆者は以前、余嘉錫（一八八四～一九五五）手校『弘決外典鈔』抄本が北京大學圖書館に所藏されていることについて、これは一九三〇年代當時、北京人文科學研究所に收藏されていた、徳富蘇峰による影印本（成實堂所藏寶永對校本^{〔2〕}）を書寫した複本であると紹介したことがある^{〔3〕}。『弘決外典鈔』（九九一年序）は、具平親王が唐・湛然撰『止觀輔行傳弘決』中の外典（漢籍）に關わる部分に注解を施した注釋書で、中國古典籍からの引用を豊富に含む。中國近現代を代表する文獻學者である余嘉錫は、日本への渡航經驗はなかったが、北京人文科學研究所が收藏した『弘決外典鈔』を利用して、そこにみえる中國古典籍の引用状況を詳密に検討、文獻考證を行ったのであった。この一例をとつてみても、北京人文科學研究所が日本と中國の古典籍研究をつなぐ場としての機能を果たしていた實態の一端が知られるわけである。

しかしながら北京人文科學研究所は、戦時下に日本が展開した「東方文化事業」の一環として設けられた機關であり、中國側からの強い批判があつた。また日本側からも古典籍の蒐集や研究は現代の中國とは乖離した不要不急の事業だとする意見があり、當該事業の所管が外務省から興亞院（一九三八年）を経て大興亞省（一九四二年）へと移つていく中で、豫算の削減など厳しい状況におかれた。とはいえ北京人文科學研究所は、その立ち上げから服部宇之吉（一八六七～一九三九）や狩野直喜（一八六八～一九四七）が中心となつてその方針を定め運営をサポートし、また橋川時雄（一八九四～一九八二）という學問のみならず企畫力、実行力、組織力にも傑出した人物が實務を進め、特色ある藏書群を形成した。またそこには、多くの中國人學者の關與と協力があり、續修四庫全書提要の編纂という大がかりなプロジェクトが推進された。そこで實踐された蒐書と研究は、中國古典學研究の方法や意義について今なお重要な示唆を與えてくれるものにみえる。

以下小稿では、北京人文科學研究所における藏書形成と古典籍研究について、關係の記録類および藏書目録を中心に辿つてみる。特に、現在中國科學院文獻情報中心（國家科學圖書館）に残る一九三九年以降

の藏書を記録した未公刊目録も紹介しつつ、戦局が深刻化する中、いかなる蒐書と研究がなされていたのかを観察しながら、中國古典學の課題について改めて考察していきたい。

一、北京人文科學研究所の事業構想

本節ではまず、北京人文科學研究所設立の経緯と、そこで計畫、構想された研究事業についておさえておく。

義和團事件賠償金を資金としてアメリカをはじめ各國が中國での文化事業を展開する中、日本においても大正二二年（一九二三）三月、外務省の管轄の下「對支文化事業特別會計法」が公布され、その具體的の事業として北京には人文科學研究所、上海には自然科學研究所を設立する構想が打ち立てられる。翌大正一三年（一九二四）二月に締結された駐日公使汪榮寶と外務省對支文化事務局長出淵勝次による「汪—出淵協定」（對支文化事業ニ關スル非公式協議會ノ覺書）は、評議員會を中日兩國人によつて組織することとし、大正一四年（一九二五）五月に沈瑞麟外交總長と芳澤謙吉在中公使が取り交わした「沈—芳澤交換公文」において東方文化事業總委員會の設立が決定される。そして同年一〇月九日から一二日に北京の北海公園靜心齋で開催された東方文化事業總委員會第一回總會には、中國側一一名、日本側七名の委員が出席し、北京人文科學研究所での研究事業についても方針を協議決定するのであるが、注目したいのは、當時の議事録に人文科學の研究として何をいかに行うべきかという具體的議論の過程が記録されていることである。總會は、中國側委員の中から柯劭忞（二八五〇—一九三三）を委員長に選出して行われ、議事録は日本側委員の服部宇之吉、狩野直喜からの意見を取り入れつつ次のように協議が進められた

ことを伝える。

すなわち一一日、柯委員長から、人文科學方面の「文化事業進行ノ類別研究」として、次の項目が提案される。

- 一、經學（小學ヲ含ム）
- 一、史學（金石、目錄等ノ學ヲ含ム）
- 一、哲學（程、朱、陸、王ヲ兼採シ西洋儒者ノ學說ヲ旁參ス）
- 一、詞章學
- 一、天算學（或ハ天算ヲ經學ニ地輿ヲ史學ニ併入ス）
- 一、氣輿學

これに續いて議事録には、

服部委員—（中略）自分ハ研究部門ヲ哲學、史學、法制經濟、文學、美術、考古學、宗教、天算ノ八部門ニ分タント欲ス

委員長—自分ハ經學ノ部門ヲ設ケ度意見ナリ

服部委員—自分ハ經學ハ哲學ノ中ニ含ムコトトセリ

狩野委員—自分ノ意見ハ經學ト哲學トハ之ヲ別ノ部門トスル方可

ナリト信ス其他ノ點ニ就テハ服部博士ノ意見ニ同意ナル力尙此

外ニ言語學ノ一部門ヲ設ケラレントヲ希望ス

服部委員—然ラハ狩野委員ノ意見ニ從ヒ經學ト哲學トヲ分チ別ニ

言語學ノ部門モ設ケ都合十部門ニシ度

とあり、經學を哲學に吸収させようという服部案に對して、兩者を分けるべきとする狩野案が提示されたこと、また狩野案は言語學という新しい領域をも提案するものであったこと、そしてその狩野案に服部宇之吉も贊同した経緯を記している。また續いて狩野直喜は「支那ノ學問ハ哲學モ道德モ宗教モ又歴史モ文學モ相互ニ關聯シ以テ渾然一個獨特ノ文化ヲ形成スルモノナレハ之ヲ悉ク現代歐米ニ於ケル科學ノ分

類法ニ依り分類セントスルコトハ困難ナルヘシ」とも發言している。中國で長年蓄積されてきた學問は哲學、道德、宗教、歴史、文學などが相互に關聯して形成されたものであり、それを人文科學の名のもとでいかに「現代歐米」と接續させていくべきか、この問いは今なお繰り返し繼續して考究すべき中國古典學、東アジア人文學の課題に他ならないであらう。

總會では、服部、狩野の意見を折衷し、人文科學研究所の研究事項を經學、史學、哲學、文學、法制經濟、美術、宗教、考古學、言語學の九門とすることとし、さらに狩野直喜が述べた次の意見が、以後の北京人文科學研究所の事業の骨格をなすこととなる。

人文科學ノ研究ニハ研究資料ヲ蒐集スル必要アリ而テ資料中最モ重要ナルハ各種ノ圖書ナリ圖書ノ蒐集ニハ多クノ經費ト時間トヲ要スル處自分ハ第一着手トシテ

- 一、續四庫全書ノ編纂
- 二、四庫全書ノ補遺

ヲ行ヒ度

これを受けて柯委員長は「狩野委員ノ説ニ大賛成ナリ」としている。

清の乾隆帝の敕命により四庫全書が編纂された後、續編の編纂、あるいは四庫全書の補遺はたびたび試みられており、いわば中國古典學にとつての「宿願」であつた。例えば、倫明（一八七五—一九四四）の『四庫全書續補』、余嘉錫の『四庫全書提要辨證』、胡玉縉（一八五九—一九四〇）の『四庫提要補正』など枚擧に暇がないが、個人の力には限界があり、人文科學研究に必要な研究資料たる圖書の蒐集、研究の重要性を主張する狩野のこの提案は學者らの念願を實現へと導くものとして歓迎されたと思われ、倫明や胡玉縉はその後の北京人文

科學研究所の活動に参加していく。

總會における狩野の提案と、それ以前のこれら中國側學者の意向とが直接關係するものかどうかなど詳細は不明である。しかし右に取りあげた總會の議事録を通してみると、北京人文科學研究所は中日共通の學問上の念願を果たすべく、高い理想を掲げ事業を開始しようにみえる。實際、大正一五年（一九二六）十一月に東京で開かれた東方文化事業總委員會第二回總會では、四庫全書の續修を北京人文科學研究所の主たる研究事項と決定し、昭和二年（一九二七）一〇月の北京での第三回總會では「圖書籌備處章程」を制定して書籍蒐集のための組織を整え、「將來獨立の漢籍専門圖書館として儲藏すべきものの蒐集を主とし、善本主義の傾向」⁷⁾による蒐書が始められた。ところが、北京の東廠胡同に地を定め、同年一二月に成立した北京人文科學研究所の事業は、翌昭和三年（一九二八）五月の濟南事件のために研究所總裁であつた柯劭忞以下中國側委員全員が辭任するという困難な局面を迎える。しかしながら昭和四年（一九二九）には研究活動を再開、一部中國側委員を「囑託」として迎える形をとり、昭和六年（一九三

一）以降は事業の中心を續修四庫全書の編目から提要の執筆へと切り替え、以下の方針のもとで活動は繼續された。

- (一) 欽定「四庫全書」に著録されたるも甚しく竄改刪削されたる書籍及び異同多き書籍の提要、竝に阮元の「四庫未收提要」の改作

- (二) 著録存目に洩れたる書籍、「永樂大典」中の輯佚書及敦煌發見の文獻に就いての提要は編纂する

- (三) 乾嘉以後の著述及輯佚書の提要を編纂する
- (四) 禁燬書及び佛道藏經中の一部、詞曲小説類、明史方志に就い

ての提要を増修する⁽⁸⁾

そして研究所において購入する圖書も、昭和九年（一九三三）以降は方針を改め、右にあげたごとき「續修四庫全書提要の編纂に必要なものを主と」する方向へと轉換し、「特に清人及び近人の著述にして學術に關係深き書籍の蒐集」にも力が注がれた。その結果研究所には、近代における中國古典學研究の一つのあり方を示すユニークな書物群が形成されることとなったのである。以下、節を改めて、その藏書形成の様相と特徴を辿ってみる。

二、北京人文科學研究所の藏書形成（一）

北京人文科學研究所における蒐書は、昭和二年（一九二七）の研究所開設以來、終戦まで續いた。開所に先立ち大正一五年（一九二六）七月に行われた總委員會臨時總會では、圖書館籌備委員に瀨川淺之進と湯中の二名が指名され、また昭和二年（一九二七）の總委員會第三回總會では左のごとき「圖書籌備處章程」が定められた。

第一條 圖書籌備委員は圖書の調査蒐集事務を管理す

前項の圖書は將來圖書館に儲藏すべきもの及び四庫全書續修に必要な書籍とす

第二條 圖書の購入は圖書籌備評議員會の議決を経べし……

さらに第三回總會では、一九二八年度の圖書籌備處豫算を議決、圖書籌備委員に湯中、狩野直喜、同評議員に柯劭忞、王樹枏、王照、賈思敏、王式通、梁鴻志、江庸、胡敦復、楊策、李盛鐸、傅增湘、瀨川淺之進、服部宇之吉、また事務主任として徐鴻寶を選出した。しかし前節でも述べたように、翌年の濟南事件の後、中國側委員は總委員會を辭す。が、昭和四年（一九二九）以降は再び中國側委員も参加し、

昭和七年（一九三二）一〇月には圖書籌備處は委員に狩野直喜、評議員に傅增湘、李盛鐸、事務主任に徐鴻寶、事務員に杉村勇造という體制で、研究事業や蒐書が繼續されていく。そしてこれ以降、東方文化事業總委員會およびその傘下の北京人文科學研究所の運営に多大な貢獻を果たした人物が橋川時雄である。

橋川時雄は、福井師範學校を修了後、中國に渡り、『順天時報』社員や雜誌『文字同盟』主宰などを經て、昭和四年（一九二九）一月より東方文化事業總委員會での勤務を開始、昭和八年（一九三三）一月からは總務委員署理として北京人文科學研究所を支え、事業を推進した。特筆すべきは、橋川がその持てる學識に加えて、中國の學者との緊密かつ廣範なネットワークを結び、また服部宇之吉、狩野直喜ら日本側との連携を絶やさず、圖書蒐集と續修四庫提要編纂事業を實質的に大きく前進させたことである。橋川は、昭和六年（一九三一）四月、濟南事件以後の東方文化事業の體制立て直しをはかるため、胡玉縉、江瀚を日本に伴い、服部、狩野と續修四庫提要編纂事業について協議する機會を設けた。また同年七月から八月にかけて橋川は「南支」に出張し、各地の學者、藏書家を訪問、圖書館等を視察し、續修四庫全書提要の編纂に向けての基盤を固めていく。また橋川は東方文化事業總委員會の署理に就任後、事務組織を統制し、昭和九年（一九三四）二月に「東方文化事業總委員會事務所暫行辦事細則」を施行、圖書籌備處を圖書部と改め、主任に徐鴻寶、主事に林季芳、小竹武夫を迎えて、書籍の蒐集に努めた。その結果を伝えるものとして残されているのが、『北京人文科學研究所藏書目錄』（昭和十三年（一九三八）五月刊。以下『目錄』）と『北京人文科學研究所藏書續目』（昭和十四年（一九三九）四月刊。以下『續目』）である。本節ではまず、この二種の目錄編

纂期までの蔵書形成について幾つかのトピックとともに考察を試みる。

(1) 善本

初期の北京人文科學研究所は「善本主義」により、稀覯書も少なからず蒐集している。公に開かれた圖書館ではなかったため、その蔵書に言及する記録は多くはないが、いままず取りあげたいのは王古魯(一九〇一〜一九五八)が「日本之中文圖」の文中で紹介する「東方文化事業總委員會圖書籌備處」の蒐書状況である。王古魯は圖書籌備處の蔵書について、宋元版はわずかであるが、鈔本、稿本、名人名家の舊藏本、また「四庫底本」が多いと指摘している。

そして、橋川時雄自身が『概要』に列挙した「本會所藏善本書」も王古魯が指摘する北京人文科學研究所藏善本の特徴に重なるものがあり、また當該研究所の蒐書の傾向を示すものでもある。いま橋川が列挙した「善本」を、そのコメントとともに掲げてみる。

- (1) 周禮注疏 一二冊 清黃丕烈校宋本、道州何氏の舊藏に係る、繆荃孫堯圃藏書題識を編せし時、未だ見及する能はざりしもの
- (2) 絳雲燼餘史稿 一〇冊 清錢謙益撰、絳雲の殘簡僅に存し、鉤乙塗改、手蹟仍ほ宛然
- (3) 度支奏議 一八〇冊 明畢自嚴撰、乾隆時四庫を修するに當り、求めて未だ獲ざりしもの、近年山東の故家に於て購得せり、完全無闕、實に經濟史上の重要史料である
- (4) 長安志 四冊 宋宋敏求撰、此の書、畢氏經訓堂校刻以後世に行はる、明刊本流傳絶えて少し
- (5) 輿都志 一八冊 明顧璘撰、此本は明の内府鈔本にして未刊刻、海内の孤帙であらう
- (6) 大足縣志 二冊 清張澍撰、未刊の稿本なり、二酉堂叢書中にも收

めず

- (7) 西清硯譜 二冊 清内府繪本、四庫本に較べて異同頗る多し、蓋し初稿であらう

- (8) 千頃齋集 六冊 明黃居中撰、居中の文集、各家書目均しく未だ著録せず

- (9) 奇福記 太平錢 各二冊 清内府五色寫本(實際は四色) 各家書目均しく未だ著録せず

- (10) 通典 一冊 宋臨安府鹽官縣刊本、宮内省圖書寮所藏のものと同本
- (1) の黃丕烈手校本や(10)の宋本が貴重本であることは當然として、(5)と(6)は方志、(9)は詞曲類の書物であり、四庫全書の不足を補うべく特に蒐集に力が注がれたカテゴリーに屬するものである。また(3)と(8)は明刊本であるが、これらも四庫全書を補うという點で重要視されたものである。そして残る(2)、(4)、(7)および方志の(5)、(6)と詞曲類の(9)はいずれも鈔本であり、(2)や(6)は撰者自身による稿本、そして(5)と(6)の方志は未刊本であることが強調されている。

ここで思い至るのは、橋川時雄が未刊稿本の出版ということにかねてより意欲的に取り組んでいたことである。すなわち橋川は、北京において『文字同盟』刊行のために組織した「文字同盟社」から、未刊稿本を「待曉廬叢書」として刊印する計畫を立て、また『文字同盟』の附刊としても未刊稿本を排印刊行している。「待曉廬叢書」の廣告には「近代支那の篤學潛儒が遺せる未刊の著述稿本を見せらるるたびに、それら至寶の散佚を懼れられると同時に、出來得べくはこれを刊印し、一には學者の渴望を醫し、一には先民の英靈を慰めたきものと思はれる」とあり、橋川が使命感をもって未刊稿本の公開を積極的に推進していたことがわかる。

また北京人文科學研究所が稿本、鈔本を多く藏することについては、「東方文化事業總委員會事務所暫行辦事細則」(一九三四年二月)に定める次のような規程にも注意される。左に抜粹する。

第十九條 本事務所圖書の調査、蒐集の範圍は、續修四庫全書提要編纂に必要な書を以て主體とす

第二十五條 本事務所は儲存の必要ありて購置の法無き書に對し、圖書部に於て方法を講じ借鈔す、その費用は圖書費より之を支出す²⁰⁾

この頃、北京人文科學研究所における蒐書が「善本主義」から「續修四庫全書提要の編纂に必要なものを主」として、「清人及び近人の著述にして學術に關係深き書籍の蒐集に努め」る方針へと轉換されたことは前節末尾でも觸れたが、その際、購入の難しい本は「借鈔」という方法によつても資料の収集が試みられたということである。實際、『目錄』には「本所鈔本」と記すものが散見される。こうして北京人文科學研究所においては、書物の成立自體は決して古いものではなくとも、學術研究を十全なものとするためには必ずや備えるべき、橋川が言うところの「至寶」が蓄えられていったものとみえる。そしてそれらは、宋元版などとはまた異なる基準の價值觀による「善本」群を形成していったのである。

(2) 名人名家の舊藏本——八千卷樓、海源閣

次に、北京人文科學研究所が蒐集した「善本」のうち、名人名家の舊藏本について、一二の代表的事例を通して考察を續けたい。

王古魯は、「東方文化事業總委員會圖書籌備處」が購得した名人舊藏書として、「怡府、劉喜海」のほか「翰林院、錢大昕、朱彝尊、天祿琳瑯、紀昀、孔繼涵、徐興公、阮元、高郵王氏、宋蘭揮、何紹基、

汪闓源、莫友芝、知不足齋、楊如是、振綺堂等」の珍藏本が少なくないことを指摘し、續いて特に丁氏八千卷樓と楊氏海源閣の舊藏書については具體的書名も列挙している²¹⁾。社會の混亂や戰禍によりこれら名家所藏の藏書群が解體離散を餘儀なくされ、他所に移つていくことに對しては、當然それを否定的に捉える見方も存しよう。ただ、それらの書物が有する價值が強く求められ、收められる場を移していくこともまた、學術文化のありよう、變遷を示す一つの現實ともいえるのではない。以下、八千卷樓と海源閣の舊藏書を例に、北京人文科學研究所の藏書と藏書形成の意味について引き續き検討する。

まず、杭州錢塘の藏書家丁氏の「八千卷樓」の書物は、清末の丁申、丁丙兄弟の死後、南京龍蟠里圖書館(現南京圖書館)に收められたが、一部は外に流れている²²⁾。王古魯は北京人文科學研究所の藏書に次の八千卷樓舊藏書が含まれていることを指摘している。

1 明黑口刊本張天師明斷辰鉤月一冊／2 清康熙刊張園眞之烏青文獻一二冊／3 舊鈔本遼載前集一冊／4 鈔本所見偶鈔四冊／5 鈔本無爲集二冊／6 鈔本肆雅堂詩選一冊／7 鈔本玉峰志一冊／8 鈔本止觀輔行傳宏訣／9 鈔本廟學典禮二冊

やはり詞曲類(1)や方志部(2、3)の書を複數含むなど、北京人文科學研究所の方針を反映する蒐書の傾向がみえるが、小稿冒頭で觸れた『弘決外典鈔』の注釋對象である佛書『止觀輔行傳宏訣』の八千卷樓舊藏鈔本が收藏されていること、またそれが「子部・儒家類」に著録されていることにも注目される。なお、北京人文科學研究所の藏書の分類については後述する。

さて、一九三八年刊行の『北京人文科學研究所藏書目錄』の著録においては、右の書目のうち八千卷樓舊藏書であることを明示するのは

6のみである。それでは王古魯はいかにしてこれらが八千巻樓舊藏書であることを知り得たのかというと、王古魯論文には油印本『圖書籌備處藏書目錄』を参照したことが注記されている。これは、一九三四年に圖書籌備處が圖書部と改稱される以前の藏書目録で、藏書に付された通し番號(書號)の「一から順に收藏書目を記し、「名人舊家」の舊藏書についてはそれを逐一明示している。『圖書籌備處藏書目錄』は幾度かに分けて作成されたようである。現在東京大學東洋文化研究所には、書號一から六四五五までを著録する六冊(C121416)と、書號七六三二から一〇〇〇〇までを著録する三冊(史「目錄」經籍「ト」一²⁶)が残されている。なお、王古魯が参照したのは前者六冊の範圍に留まるが、後者三冊をみると、さらに以下の書目が八千巻樓舊藏書であったとの記録が見出せる。

10 棟亭書目 清曹寅撰 舊鈔本 一函二冊 八〇八六

11 高東溪先生文集六卷附錄一卷 宋高登撰 明林希元編 鈔本 一函一冊 八五九七

12 黃淳父先生全集二四卷 明黃姬水撰 明萬曆間刊本 一函八冊 九〇八九

13 小學史斷四卷首末二卷 宋南宮靖一撰 明徐師曾註竝續撰 明嘉靖間刊本 一函二冊 九三三四

14 始豐稿一四卷 明徐一夔撰 舊鈔本 一函四冊 九六〇七

15 黎陽王襄敏公集四卷 明王越撰 明刊 一函八冊 九六二二

書號一〇〇〇一以降の書物については、舊藏者情報をも載せる目録の存在は確認できていないが、いま東京大學東洋文化研究所に残るこの九冊の目録のみを通して、北京人文科學研究所にはさまざまな「名人舊家」の舊藏書が蒐集されていることがわかる。その一について

いての検討は後考を期したいが、ここではもう一つ、中國藏書家の藏書散佚の典型例ともいえる山東聊城楊氏の海源閣の舊藏書についても觸れておきたい。

數多の善本コレクションを誇った海源閣藏書の流出、散佚をめぐっては、『中華圖書館協會會報』にたびたび關連記事が掲載されるなど、中國の學界の大きな關心事であつた様子が傳わるが、東方文化事業總委員會で圖書籌備委員を務めた瀨川淺之進も昭和四年(一九二九)五月に外務省文化事業部長坪上貞二に宛てて「海源閣藏書出售二關報告ノ件」との文書を提出して、海源閣藏書の宋版の流出狀況を具體的書名とともに報告している。そしてまさにその時、日本側が海源閣の宋本を購入していた一例を辿ることができる。

一九二九年、大連圖書館館長の柿沼介と漢籍擔當司書の松崎鶴雄は、橋川時雄や杉村勇造の協力のもと、北京で漢籍三萬冊を購入した。²⁷そして橋川時雄は一九三四年、そのうちの一本「宋嘉泰重修本三謝詩」の影印を刊行しているが、橋川はそれに附した「書後」で、これは「北平坊」から購入された海源閣舊藏書であると述べている。注目したいのは、橋川がここで「士林」のため、また「友好」のために、この「海内孤本」の影印を公開すると述べ、そしてその影印の作成が、故宮博物院古物館館長等を務め東方文化事業總委員會の圖書部主任としても貢獻した徐鴻寶(一八八一—一九七一)の盡力によつて故宮博物院でなされたことと記していること、さらには同じく東方文化事業總委員會の事業および續修四庫全書提要の撰述に寄與した胡玉縉が跋文を寄せていること、である。このように當時、日中の機關や學者のネットワークの中で書物の蒐集、複製刊行、そして研究が行われていた様相が知られるのであるが、その中心的役割を果たしていたのが他ならぬ

橋川なのであつた。⁽³¹⁾

さて、海源閣の舊藏書は北京人文科學研究所にも收藏され、『圖書籌備處藏書目錄』に據れば計一〇部の海源閣舊藏書の存在が確認できるが、實際その内の一本が閲覽に供されている記録がある。そこで次に、北京人文科學研究所の藏書の閲覽、利用状況をみる。

(3) 藏書の閲覽、利用

北京人文科學研究所の藏書は、基本的に續修四庫全書提要の執筆編集を目的として蒐集されたものではあるが、當時北京を訪れた日本研究者の多くは北京人文科學研究所に足を運び、橋川時雄を通じて中國の學術界と交流し、藏書も利用した。しかしながら藏書の閲覽や利用に關する具體的記録は多くない。以下わずか二例ではあるが、當該研究所が果たした役割ということとにも取りあげてみる。

一つは、近藤正治（一八八三—一九五九）による閲覽の記録である。近藤は東京高等師範學校を卒業、諸橋轍次の『大漢和辭典』編纂に貢獻した人物であつた。⁽³²⁾『斯文』一六一—一（一九三四年）掲載の「遊北平漫語」には、近藤が橋川の招きを受けて北京を訪問、王重民、孫人和、胡玉縉らと面會した他、北京人文科學研究所にて次の圖書を閲覽したことが書き留められている。

學讀書堂文稿 二卷 撰者未詳／王莘民遺稿 山陽王廷佐撰／經史雜記 八卷 安康 王玉樹撰／宋槧漢書殘本攷異 一冊 錢泰吉撰／三傳經文辨異 一冊 焦廷琥撰

「宋槧漢書殘本攷異」は海源閣舊藏本である。北平圖書館なども見學した近藤は「支那學は其本場北平に中心が存在してゐること、汗牛充棟の書籍、之が研究には、書籍の選擇と研究方法の攷究とが肝要であつて、而も其選擇と方法とは北平に於て尤も得易いやうに感じた」

と記している。これは當時の實感を伝えるものであろう。

もう一例は、近藤の訪中と同時期に北京に留學していた目加田誠（一九〇四—一九九四）である。近年公刊された日記には、中國文學研究者としての目加田の留學生活の詳しい記録が記されているが、その中に北京人文科學研究所に關わる次のような記述がある。

午前中、北平圖書館に行きしも尋ぬる書物見當らず、文化事業にゆく。／小竹君の部屋をかり、魏源の『詩古微』『書古微』『聖武記』『海國圖志』『經世文編』を借りて書きぬぎす。（昭和九年（一九三四）二月二日）⁽³³⁾

湖南の學者魏源（一七九四—一八五六）について報告文を書き始めた目加田は、その著作を閲覽するため北平圖書館を訪れたが目當ての書物がなく、「文化事業」すなわち北京人文科學研究所へ行き、魏源の書物を探し當てる。「小竹君」とは當時の圖書部主任小竹武夫（一九〇五—一九八二）である。このエピソードは、研究所が、中國古典學を研究する者が必要とする資料を備えた機關としての機能を現實に果たしていたことを傳えていて注目される。小稿冒頭に掲げた余嘉錫も、北京人文科學研究所のみが備える書籍に狙いをつけ、それを見逃すことなく研究に活かしたものと思われるのである。

そして目加田誠がこの時閲覽した書目に關して、さらにもう一點、注意すべきことがある。ここに挙げられた書目のうち『詩古微』『書古微』『海國圖志』『經世文編』は『圖書籌備處藏書目錄』に著録があり、當時すでに研究所に收藏されていたことが藏書目録からも確認できるが、残る『聖武記』については『圖書籌備處目録』にも、そして『目錄』『續目』のいずれにも著録がない。しかし實は、北京人文科學研究所の藏書に『聖武記』が存在したことを傳える資料がある。

それは、『目録』『續目』に續き研究所の藏書を著録した『北京人文科學研究所藏書目錄再續』³³（以下『再續』）である。小稿冒頭でも觸れたように、『再續』はこれまで公刊されることのなかった目録である。したがって目加田がこれを閲覽した當時、研究所に『聖武記』が收藏されているという情報は外部には知られていなかったかもしれない。しかし、魏源の書物の閲覽を希望した目加田に對して、研究所側は既刊目錄に著録されているもの以外の書物も含めて魏源の資料をまとめて「出納」できる體制を整えていたのである。目加田の日記は、研究所のそうした藏書管理の状況をも伝える記録なのである。

次節ではその『再續』を通して、一九三九年以降の北京人文科學研究所の藏書形成について考察を續ける。

三、北京人文科學研究所の藏書形成（二）

北京人文科學研究所の藏書については、『目録』『續目』以後、目錄類が公刊されておらず、一九四〇年一月に刊行された『便覽』以後はその蒐書状況を伝える統計資料もなく、一九四五年の接收までの後半期の藏書形成を具體的に知ることは難しかった。しかし、戦後橋川時雄が外務大臣吉田茂に提出した「東方文化事業總委員會中國側接收の顛末報告の件」³⁴には、「本會所藏の圖書に就ては、既に編印されたる北平人文科學研究所書籍目錄十冊及び其の後の購入書目を相添へ、一部の紛失もなく、其諸原簿に照して點檢の上、教育部に接收移交されたり」とあり、『目録』『續目』以後も購入された書籍が存在したことが示されていた。そして、ここに取りあげる『北京人文科學研究所藏書目錄再續』三冊（中國科學院文獻情報中心所藏）こそ、北京人文科學研究所の最終的な藏書の全體像を伝える、現時点においては唯一の資

料といえるものである。

（一）『北京人文科學研究所藏書目錄再續』

『再續』三冊は手書きにより書目を著録した分類目錄で、分類法は『目録』『續目』をほぼそのまま継いでいる。背にはそれぞれ「北京人文科學研究所藏書目錄（四）再續／經史（二）中國科學院圖書館藏」「北京人文科學研究所藏書目錄（五）再續／史（二）中國科學院圖書館藏」「北京人文科學研究所藏書目錄（六）再續／子集叢中國科學院圖書館藏」とある。北京人文科學研究所の藏書は一九四五年一〇月に教育部沈兼士により接收され、翌一九四六年八月には歴史語言研究所に移管され、その後は中國科學院に歸屬する。『再續』は一九五一年の中國科學院發足後に製本されたものである。

『再續』では「書號」「書名」「著者」「版本」「函冊」「備考」の欄を設けた用箋に精密な文字で書誌情報が書き記されている。藏書の通し番號を示す書號は『續目』を繼ぐものと思われるが、一五四四三から始まり一六〇三九までのみが確認でき、その他の書目の書號欄は空欄になっている。一方「書號」欄上の眉欄には算用數字で各書目に別途通し番號が書き込まれている。實は、中國科學院文獻情報中心の古籍閱覽室に保管されている『目録』と『續目』には、同様に眉欄に算用數字で部類ごとに各書目の通し番號が書き込まれており、『再續』の眉欄の數字はこれに連續するものとなっている。なお『再續』には「僞滿康德」「僞滿國務院」など、「僞滿」の表記が散見されることから、これが北京人文科學研究所の藏書が接收されて以降、中國側の圖書館員の手によって記述されたものであることが明らかである。以下まず、『再續』に著録された書目數を概観した後、『再續』にみえる藏書の特徴について考察を進めたい。

表：北京人文科學研究所藏書部數分類別一覽
 (『目錄』、『續目』、『再續』)

分類	『目錄』	『續目』	小計*	『再續』	合計	
經部	易類	236	7	243	8	251
	書類	136	1	137	18	155
	詩類	166	3	169	33	202
	禮類	209	6	215	39	254
	樂類	24	0	24	0	24
	春秋類	121	7	128	18	146
	四書類	235	14	249	21	270
	孝經類	20	2	22	1	23
	小學類	476	34	510	64	574
	經總類	125	12	137	25	162
	計	1748	86	1834	227	2061
史部	正史類	93	9	102	35	137
	編年類	95	7	102	38	140
	紀事本末類	57	4	61	16	77
	別史類	66	3	69	17	86
	雜史類	177	4	181	57	238
	史鈔類	19	4	23	2	25
	史表類	13	1	14	7	21
	載記類	43	0	43	13	56
	外國史類	8	1	9	10	19
	傳記類	613	91	704	387	1091
	地理類	754	44	798	379	1177
	時令類	4	6	10	3	13
	詔令奏議類	191	18	209	115	324
	職官類	64	3	67	70	137
	政書類	442	57	499	1011	1510
	目錄類	383	77	460	259	719
	金石類	412	25	437	111	548
	史評類	66	9	75	25	100
	史料類	9	1	10	129	139
	計	3509	364	3873	2684	6557
子部	儒家類	195	35	230	78	308
	兵家類	39	11	50	12	62
	法家類	25	0	25	27	52
	農家類	38	2	40	23	63
	醫家類	176	79	255	23	278
	天文算法類	38	17	55	14	69
	術數類	39	11	50	9	59
	藝術類	100	41	141	21	162
	釋家類	43	17	60	28	88
	道家類	55	10	65	-	65
	雜家類	431	67	498	223	721
	說叢類	154	25	179	20	199
	譜錄類	46	8	54	8	62
	類書類	157	37	194	58	252
	計	1536	360	1896	544	2440
	集部	楚詞類	19	1	20	34
別集類		2066	824	2890	249	3139
總集類		488	167	655	75	730
詞曲類		95	75	170	8	178
小說類		8	2	10	9	19
集評類		79	29	108	19	127
計		2755	1098	3853	394	4247
叢書部	類叢類	347	107	454	64	518
	雜叢類	310	36	346	35	381
	郡邑類	62	22	84	4	88
	族望類	71	36	107	1	108
	專著類	341	63	404	58	462
	計	1131	264	1395	162	1557
方志部	-	-	2144	-	2144	
總計	10679	2172	14955	4011	19066	

*『目錄』と『續目』の各分類の書目数の小計。

表には、現在中國科學院文獻情報中心に所藏されている『目錄』『續目』『再續』の眉欄に書き入れられた算用數字の通し番號により、各分類別の藏書部數を示した。『目錄』、『續目』以後、『再續』においては約四千部の書目が増加しており、また、いくつかの分類において顯著な増加が確認できる。例えば、史部・目錄類や子部・雜家類(雜誌・期刊)の増加は、當時各種目錄や期刊雜誌が續々と刊行され、それらを積極的に蒐集した結果と思われる。また、史部・金石類の書目の増加も、當時新たに盛行した學問領域の傾向と連動するものとみえ、とりわけ羅振玉(一八六六—一九四〇)やその子羅福頤(一九〇五—一九八二)の著書がそろっていることにも注意される。羅振玉は滿州國の參議府參議や監察院長も務めており、橋川は後日回想して「大

連の圖書館に行つて、中國にない書物をもっているかどうか、若い研究員をつれていつて調べました。一緒に行つたのはたしか謝國禎・張壽林の二人だつたと思ひます。その時は羅振玉の藏書のことも調べた。それからさらに京城の圖書館に行つて調べさせ、ゆくゆくは日本の圖書館へも行かせる段取りにしていたんです。しかし日本の圖書館には結局行かないで終わった。……(羅振玉は筆者補)いろいろな面で非常によく援助してくれました」と語っている。このように『再續』には、學問の新たな趨勢を示す書物の増加や、橋川と交流をもつた學者による便宜の提供、また大連や京城への訪書活動の成果などがさまざまに反映されており、それぞれ検討考察を加えるべきところではあるが、ここでは右の文で橋川が言及している京城での調査ということと、

北京人文科學研究所における朝鮮本の蒐集について注目してみたい。

(2) 朝鮮本の調査、蒐集

北京人文科學研究所の藏書中、日本撰述書は『目錄』『續目』にもしばしば確認できるが、朝鮮本は合計三二部に止まる。これに對して『再續』においては、増加した四〇一一部中、朝鮮本は二二一部に上る。北京人文科學研究所の特に後半期において朝鮮本が増加している理由の一つは、先に觸れた橋川による京城での書籍調査が一九四〇年に實施されたものであったことと連動すると考えられる。橋川はこの時、東方文化事業總委員會の研究員であつた張壽林、謝國禎、班書閣、孫海波の四名の中國學者を帶同して京城を訪問している。そして、橋川を京城での書籍調査へと赴かせたきっかけとして注目されるのが、北京人文科學研究所での活動開始當初の一九三一年、橋川が章炳麟（一八六九〜一九三六）のもとを訪れた際に章炳麟が語つた、次のような話が記し留められていることである。

又云ふ、『清史稿』の著作あるも不滿意の點甚だ多し。清史の資料は『明實錄』及明人の公私著書中に多し、然も建州時代の史料は朝鮮に求めざる可らず。清人は初め文字なければ、其祖の世系に至りては、顛倒歛脱多し、明人の記録にも一貫せざる所多きなりと語り、機會を得れば其史料を求むる爲に朝鮮に赴き度き希望を漏らしたり。

この面談は、中國史研究には朝鮮本の調査が必至であるということ、橋川に深く印象づけたものと想像される。

さて、『再續』をみると、特にいくつかの部類において朝鮮本の増加が顯著である。例えば史部・傳記類・志録や集部・別集類・明などの部類では、『再續』に著録された書目の過半数を朝鮮撰述書が占め

ている。中でも經部・禮類・雜禮は一六部中一四部までもが朝鮮撰述本である（『再續』の記載に基き左に列擧する）。そしてそれらの書目に對する提要の執筆狀況を合わせてみると、北京人文科學研究所における典籍の調査、研究、蒐書狀況の一端が浮かび上がる。

- ・ 奉先雜儀上下二卷 明朝鮮李彥迪「奎章閣藏刊本・孫海波」
 - ・ 四禮訓蒙不分卷 朝鮮白沙李恆福編「朝鮮光海君一四年初刊本・班書閣」
 - ・ 喪禮備要上下二卷 朝鮮申義慶「奎章閣藏印本・張壽林」
 - ・ 家禮輯覽一〇卷 明朝鮮金長生「奎章閣藏印本・張壽林」
 - ・ 疑禮問解四卷 金長生纂述、金士剛校「刊本・孫海波」
 - ・ 家禮源流一四卷又續二卷 朝鮮俞燦撰
 - ・ 明齊先生疑禮問答八卷 朝鮮尹拯「奎章閣藏本・張壽林」
 - ・ 南溪先生禮說二〇卷 朝鮮李文純著、金直鄉纂輯「奎章閣藏印本・張壽林」
 - ・ 三禮儀三卷外附改葬儀 朴世采著「奎章閣藏刊本・孫海波、張壽林」
 - ・ 增補四禮便覽八卷補遺一卷 朝鮮李陶菴撰、黃泌秀增補「奎章閣藏刊本・孫海波」
 - ・ 禮疑類輯二四卷又附錄上下二卷 朝鮮李惟哲著、朴聖源輯「朝鮮刊本」
 - ・ 家禮增解一四卷 朝鮮李孟宗「朝鮮刊本・班書閣」
 - ・ 常變通考三〇卷 朝鮮楊長源「奎章閣藏刊本・孫海波」
 - ・ 改葬備要不分卷 朝鮮橫溪病損
- 「」には、現在殘る當該書目の提要稿本が用いたテキストと提要の執筆者を掲げたが、右にあげた一四の書目のうち、提要稿本が殘るのは執筆者不明の「禮疑類輯」を除き、他は全て一九四〇年の橋川

の京城訪問に同行した孫海波、班書閣、張壽林の執筆によるものである。またもう一名の同行者謝國禎も、「建州紀程圖記一卷」、「軍門瞻錄一卷」、「眉巖日記草十一冊」、「攷事撮要三卷」、「孫谷集六卷」など、『再續』の各書類に著録される朝鮮本の提要を執筆している。

なお雜禮の部類の状況に再び目を戻すと、提要の執筆に際しては『再續』に著録されているテキストではなく、奎章閣藏本が多く用いられている。このことから鑑みるに、これら朝鮮本の提要執筆は、一九四〇年の京城での實地調査に際して行われたものであり、橋川に同行した中國學者が集中して提要執筆に取り組んだ様子が推し量られる。つまり今にいう「域外漢籍研究」が、日中雙方の人士の協同により實踐されていたわけである。そしてそうした典籍の調査、提要の執筆と並行して、あるいはそれを追うように北京人文科學研究所における關連の典籍の蒐集にも力が注がれていたであろうが、その途上で研究所は閉じられたのである。

またこのように、北京人文科學研究所における蒐書に先んずるかたちで、各地の「善本」調査と提要の執筆が進められたことは、孫楷第（一八九八〜一九八六）らが擔當した「集部・小説類」にも同様の現象がみられる。すなわち、小説類の提要稿本には「日本内閣文庫」や「大連圖書館」などの本が多く用いられているが、北京人文科學研究所の『目録』『續目』、そして『再續』における小説類の著録はわずかである（表参照）。なお、北京人文科學研究所の目録が小説を集部に置いているのは日本の影響を受けたもので、中國における目録では最初例であることが指摘されている⁴⁵。そこで北京人文科學研究所の目録分類のことに觸れ、小稿を結びたい。

おわりに

北京人文科學研究所の藏書目録の分類が、四庫全書の分類を基本としつつも、獨自の特徴を備えるものであることは、長澤規矩也（一九〇二〜一九八〇）や植野武雄（一九七五〜一九九九）⁴⁶による指摘がある。いま、長澤の言を引くと、

分類は四庫に則り、増訂を施したものの。…目録と金石とはばかに詳しい。小説を説叢と避けたのはよいが、雜家に合せなかつたのはどうか。これだけ細別したのだから編者小竹氏の努力は大したものであらう。叢書と方志とが各別冊になつてゐる⁴⁷。

とある。ここで長澤が指摘する「目録」類の詳しさに關して注目されるのは、北京人文科學研究所の『目録』と『續目』は小竹武夫の編によるが、「東方文化事業總委員會事務所暫行辦事細則」（一九三四年）には事務囑託の蕭璋が「本會藏書の分類を擔當」するとあり、その蕭璋が編纂した『國立北平圖書館書目目録類』（一九三四年八月印行）が、ほぼ『目録』に一致する詳しい「目録類」の分類方法をすでに提示していることである。よつて少なくとも、「目録類」の分類方法については蕭璋の關與、貢獻は明らかであり、ここにも「日中協同」の古典學研究成果が現れていることになる。

なお長澤は續いて發表した「漢籍集部分類表」⁴⁸で、漢籍の分類について「子部小説家類は紛しいから省いて、大部分雜家類に入れ」、「戲曲小説類を集部の附録」とする方針を提案している。西洋の影響を受けて近代アカデミズムが形成されていく中で、中國古典學の體系をどのように取り扱っていくか。古典籍の目録分類は、その葛藤と試行錯誤の過程を如實に反映するものであるが、長澤は「支那の學問は、西

洋の學問とは根本的に異なるのである。故に、西洋流の分類法は通用しにくいのは當然」として「依然として四庫分類法を探る」と述べる。これは小稿第一節でとりあげた、中國古典學を含む人文科學研究の對象をどのように設定するかという、北京人文科學研究所設立時の議論に再び重なる問題である。

興味深いのは、橋川時雄は終戦後に歸國して京都女子大學などで教鞭を執るが、その際「文史學」なる名稱のもとで講義を行つてゐることである。橋川は次のように述べている。

中國の人文原理は、質的にも外形的にもきわめて多彩ではあるが、そのうちに整わたる條理要件がある、複雑でなくて錯綜である、そのうちに兩つの主要なる色絲が錯綜されている、それは『文』と『史』である。中國の歴史文化には文的事象と史的事象の兩つが『ひとつ』の映像として組成されてゐるということである。……文史兩つの事象ではあるが一つの顔にみるという意味で、文史の不一二性が強調される。^①

中國の學問は、文學や史學などが「渾然一個獨特ノ文化ヲ形成スルモノ」と主張した狩野直喜の發言が再び思い起こされる。

近代以降の新たな「傳統」の中で、中國古典學をいかに位置づけていくか。圖書分類においては中國古籍(四部分類)とその他の書籍を切り分けるダブルスタンダードでいくのか、あるいはそれらを一つの基準のもとにまとめるのか、また學問體系はいかに構築すべきか、そしてまた古典學の現代的意義はいつにあるのか。これらの課題に對する回答は、時代とともに變わりゆくものであろうが、中國古典學の立場からいかなる發言が可能かと考えるとき、北京人文科學研究所の實踐は正負にわたるさまざまな示唆となる。すなわち、人文科學に

における圖書資料の意味、その體系化の問題、また中國古典學を「域外」を含む「東アジア古典學」へと展開することの意義と難しき、また國や地域を超えた協同研究のあり方など、未完に終わったそのプロジェクトをいかに評價し、批判し、活かしようのか、現在に向けて殘された課題として受けとめたいと考える。

なお、北京人文科學研究所の藏書の一部は臺灣に運ばれ、中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館に收藏されている。そして北京人文科學研究所舊藏書を含む「珍本」の影印などが近年續々と刊行されている。^② 圖書館史や圖書館學に關する研究や資料の刊行は中國でも相繼いでおり、北京人文科學研究所が目指した人文科學、古典學は、いままた新しいステージを切り拓きつつあるともいえよう。

注

- (1) 北京人文科學研究所および東方文化事業總委員會については、『東方文化事業總委員會並北平人文科學研究所の概況』(一九三五年、以下「概況」)。阿部洋『對支文化事業』の研究——戰前期日中教育文化交流の展開と挫折——(汲古書院、二〇〇四年)。今村與志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』(汲古書院、二〇〇六年)。高田時雄編『民國期の學術界』(臨川書店、二〇一六年)。小黒浩司『圖書館をめぐる日中の近代、友好と對立のはざままで』(青弓社、二〇一六年)。また河野貴美子「北京人文科學研究所の藏書から考える「投企する古典性」(荒木浩編『古典の未來學——Projecting Classicism』文學通信、二〇一〇年)参照。
- (2) 民友社、一九二八年刊。
- (3) 河野貴美子「北京大學圖書館藏余嘉錫校『弘決外典鈔』について」『汲古』五八、二〇一〇年二月。

- (4) 昭和一〇年(一九三五)九月一日に北京大使館參事官若杉要が廣田弘毅外相にあてた意見書「對支文化事業改善案並北平ニ於ケル文化事業振興案ニ關スル件」(『各國ノ團匪賠償金處分關係雜件ノ日本ノ態度 昭和十年』(國立公文書館アジア歴史資料センターデータベース)等参照。
- (5) 『總委員會關係雜件總委員會總會關係第一卷』「第一回總會大正十四年十月分割2」(國立公文書館アジア歴史資料センターデータベース)参照。
- (6) 「東方文化事業總委員會並北京人文科學研究所便覽」一九四〇年(以下『便覽』。前掲注(1) 今村與志雄編書所收) 一八〇—一八一頁参照。
- (7) 前掲注(1) 『概況』「八、圖書の購入及整理」二七丁ウ。
- (8) 前掲注(1) 『概況』「六、續修提要編纂の事業經過」二二丁ウ。
- (9) 前掲注(1) 『概況』「八、圖書の購入及整理」二七丁ウ。
- (10) 前掲注(1) 『概況』「三、圖書館設置の籌備處開設」九丁オーウ。
- (11) 『總委員會關係雜件第一卷』「總委員會雜信昭和七年中國書籌備處人員表」(國立公文書館アジア歴史資料センターデータベース) 参照。
- (12) 橋川時雄と中國學者の幅廣い交遊關係はその著書『中國文化界人物總鑑』(中華法令編印館、一九四〇年)が中國の文化界人物「四千五百人」(傳增湘序)の略傳を記すことが端的に示す。
- (13) 橋川時雄「天津、濟南及長江地方學事視察報告書」(前掲注(1) 高田時雄編書所收) 参照。
- (14) 昭和九年度(一九三四)から一二年度(一九三七)まで、年度毎の擬購圖書明細書が残る。『北京圖書館關係雜件第二卷』(國立公文書館アジア歴史資料センターデータベース) 参照。
- (15) 王古魯は日本に留學し東京文理大學教授等を務めた人物。苗懷明整理『王古魯小説戲曲論集』(中華書局、二〇一三年)等参照。
- (16) 『圖書館學季刊』九一二、一九三五年六月。
- (17) 『文字同盟』第一號(一九二七年)掲載の廣告参照。『文字同盟』は影印本(橋川時雄主編、今村與志雄編『文字同盟』全三卷、汲古書院、一九九〇—一九九一年)がある。
- (18) 前掲注(17) 『文字同盟』参照。
- (19) 前掲注(1) 『概要』「五、本會事務組織の統制」一七丁オーウ。
- (20) 前掲注(1) 河野貴美子論文参照。
- (21) 前掲注(16) 王古魯論文。なお王古魯は「最近日人研究中國學術之一斑」(一九三六年)で他の名人名家舊藏本等も列挙している。
- (22) 石祥「杭州丁氏八千卷樓書事新考」(上海古籍出版社、二〇一一年)等参照。
- (23) 『圖書籌備處藏書目錄』には合計二六部の書目に對してそれが「四庫底本」であることも示されている。
- (24) 李雲『海源閣史』(中華書局、二〇一五年)等参照。
- (25) 「海源閣之調查與協議」『中華圖書館協會會報』六一四、一九三一年二月、「海源閣續聞」『同』六一五、同四月、「海源閣續訊」『同』六一六、同六月、「魯省府價買海源閣藏書」『同』七一、同二〇月、「中央將收買海源閣藏書」『同』一〇一三、一九三四年二月、「北平圖書館價購海源閣藏書」『同』二〇一一・二・三、一九四六年六月等。以上『中國圖書館學史料叢刊』(國家圖書館出版社、二〇〇九年) 参照。
- (26) 『參考資料關係雜件第一卷』(國立公文書館アジア歴史資料センターデータベース) 参照。
- (27) 岡村敬二「遺された藏書—滿鐵圖書館・海外日本圖書館の歴史」『滿鐵圖書館』(阿吡社、一九九四年)等参照。
- (28) 上海古籍出版社の複製(一九八三年)がある。
- (29) 徐鴻寶は北京大學圖書館館長、國立北平圖書館探訪部主任、また戦後は上海博物館館長等を歴任した人物。
- (30) 橋川は提要の編纂において、「一番頼り」になった中國學者は胡玉縉

であったと述べている。前掲注(1) 今村與志雄編書所收「東方文化事業總委員會・北京人文科學研究所のこと」三〇九頁參照。

- (31) 北京人文科學研究所でも例えば傅增湘舊藏宋監本「周易正義一四卷」の影印を一九三五年に出版している。「書誌學」六一二、一九三六年二月參照。

- (32) 春秋權衡一七卷五五二五、丹溪先生金匱良方三卷五五二九、宋葉漢書殘本攷異五八七七、史記一三〇卷六二八四、灌纓亭筆記一〇卷附禮記集說辨疑一卷六二八五、醫經小學六卷傷寒治例一卷六二八六、飲膳正要三卷六二八七、說文解字五音韻譜一二卷六二八八、周易纂言集註四卷六二八九、難經本義二卷六二九〇。四桁の漢數字は書號。

- (33) 池澤正晃「寫真でたどる『大漢和辭典』編纂史第一部『大漢和辭典卷一』刊行と原版焼失まで―一九二六(大正一五)年―一九四五(昭和二〇)年その五」二〇一六年六月六日(漢字文化資料館ホームページ)參照。

- (34) 九州大學中國文學會(代表靜永健)編『目加田誠「北平日記」―一九三〇年代北京における日中學術交流―』(中國書店、二〇一九年)二〇九頁。

- (35) 「再續」の基本事項は前掲注(1) 河野貴美子論文も參照。

- (36) 昭和二年(一九四六)五月一〇日。前掲注(1) 今村與志雄編書二一六頁。

- (37) 實際には孫海波、班書閣を加えた四名。後述。

- (38) 前掲注(30)「東方文化事業總委員會・北京人文科學研究所のこと」三一五、三二七頁。

- (39) このうち七二部は朝鮮において撰述された書物を日本(朝鮮總督府等を含む)で刊行したもの。

- (40) 『書物同好會會報』九(一九四〇年九月、龍溪書舎一九七八年複製)

北京人文科學研究所における藏書形成と中國古典學

參照。

- (41) 前掲注(13) 橋川時雄「天津、濟南及長江地方學事視察報告書」一〇頁。なお橋川は「章太炎先生謁見紀語」として當日の筆談記錄も殘している。前掲注(1) 高田時雄編書所收。

- (42) 史部・傳記類・志録は二七部中一五部、集部・別集類・明は五八部中三七部が朝鮮本。

- (43) 中國科學院圖書館整理『續修四庫全書總目提要(稿本)』(齊魯書社、一九九六年)および同書前言(羅琳執筆)參照。

- (44) 當時の中國における小説研究については稻森雅子『開戦前夜の日中學術交流―民國北京の大學人と日本人留學生―』(九州大學出版會、二〇二一年)等も參照。

- (45) 金文京「中國目錄學史上における子部の意義―六朝期目錄の再檢討―」(『斯道文庫論集』三三、一九九九年二月)。また河野貴美子「日中近代の圖書分類からみる「文學」、「小説」」(小峯和明監修、金英順編『シリーズ日本文學の展望を拓く 第一卷 東アジアの文學圈』笠間書院、二〇一七年)も參照。

- (46) 「漢籍分類法變遷史」(『收書月報』八八、一九四三年五月)。植野武雄については吾妻重二「植野武雄とその東洋學―附・著述目錄」(『關西大學東西學術研究所紀要』五一、二〇一八年四月)參照。

- (47) 「北京人文科學研究所藏書目錄」(『書誌學』一一一六、一九三八年一月)三一頁。

- (48) 前掲注(1)「概況」五、本會事務組織の統制」二〇丁ウ參照。

- (49) 一九三九年初出、『長澤規矩也著作集第七卷』(汲古書院、一九八七年)四六四―四六九頁。

- (50) 橋川時雄「中國文史學概論 1. 自序篇」一九四八年謄寫版一三頁。

- (51) 邱仲麟主編『傅斯年圖書館藏古籍珍本叢刊』全三〇册(中央研究院歷

史語言研究所、二〇二一年）等。

付記・・資料調査に際しては、関係機関に格別の便宜をいただいた。